

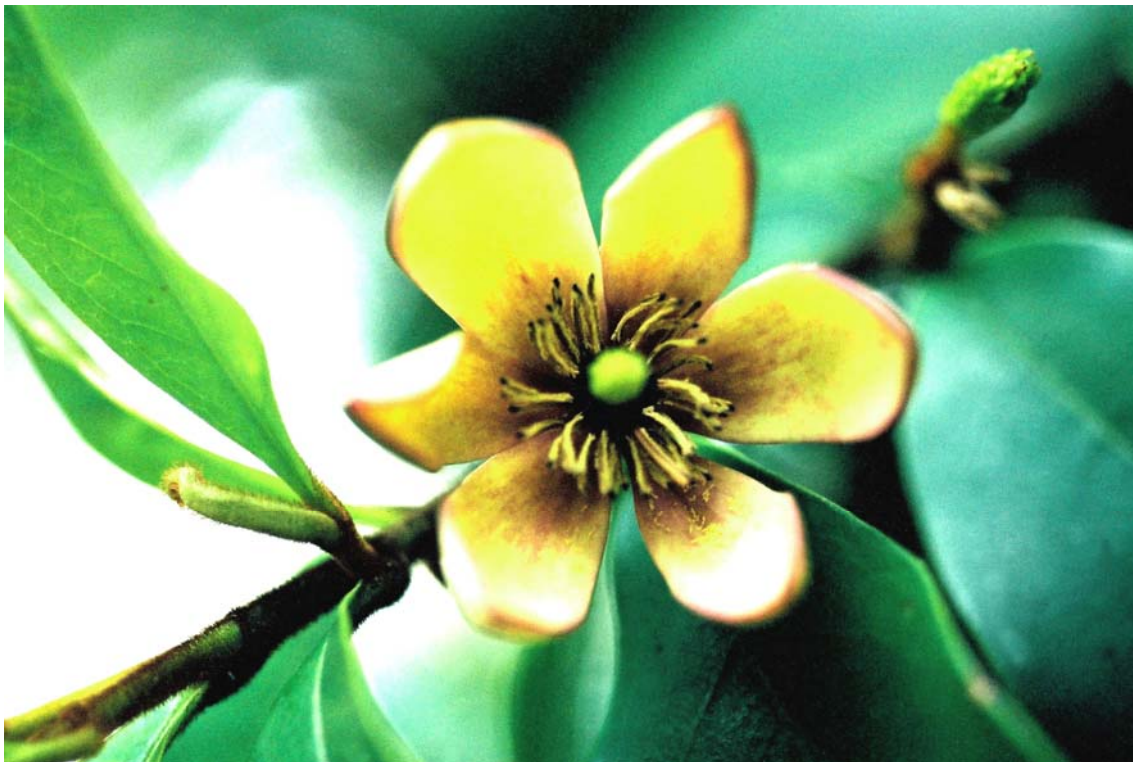
10) オガタマ=小賀玉

オガタマはモクレン科の常緑高木で、関東以西の温暖な地域に自生し、日本に自生するモクレン科では唯一の常緑樹である。高さは15m以上になるものもあり、京都市上京区の白峯神宮には、京都市の天然記念物に指定され、樹齢が800年に達する木もある。長楕円形の葉は互生し、革質で艶がある。早春、葉腋に、淡黄色で強い芳香のある花を開き、果実はいびつな球形で松笠状につける。和名の由来にはいくつかの説があって、招霊=オギタマで、この枝を神前に供えて、神霊を招く習慣があったところからという説、オガタマは小香玉の意味とする説、オガミタマ(拝魂)が転じたとする説などである。確かにオガタマは神社の境内などに多く植えられており、神霊との関わりは否定できない。このためか別称としても、弘法大師に因むタイシコウとか、トキワフジ、ローソクの木などとも呼ばれている。ヒサカキやサカキが神前に備えられる以前には、このオガタマの木が用いられていたという説がある。しかしサカキやオガタマは関東以北ではほとんど見る事ができない。このため鎌倉時代以降になって、関東方面が政治の中心になると、オガタマに代わってよく似たヒサカキが玉串として用いられるようになったとする説には説得力がある。サカキやヒサカキも得られない地方ではソヨゴなども用いられていたようで、それぞれ常緑の照葉樹で葉が互生するところが共通している。しかしヒサカキは本州北部まで産するものの、その他の植物はおおむね関東南部までで、このような観点からすると、日本人の神様は南の方との関りが深く、西北方面の朝鮮半島とは縁が薄かったようにも見える。

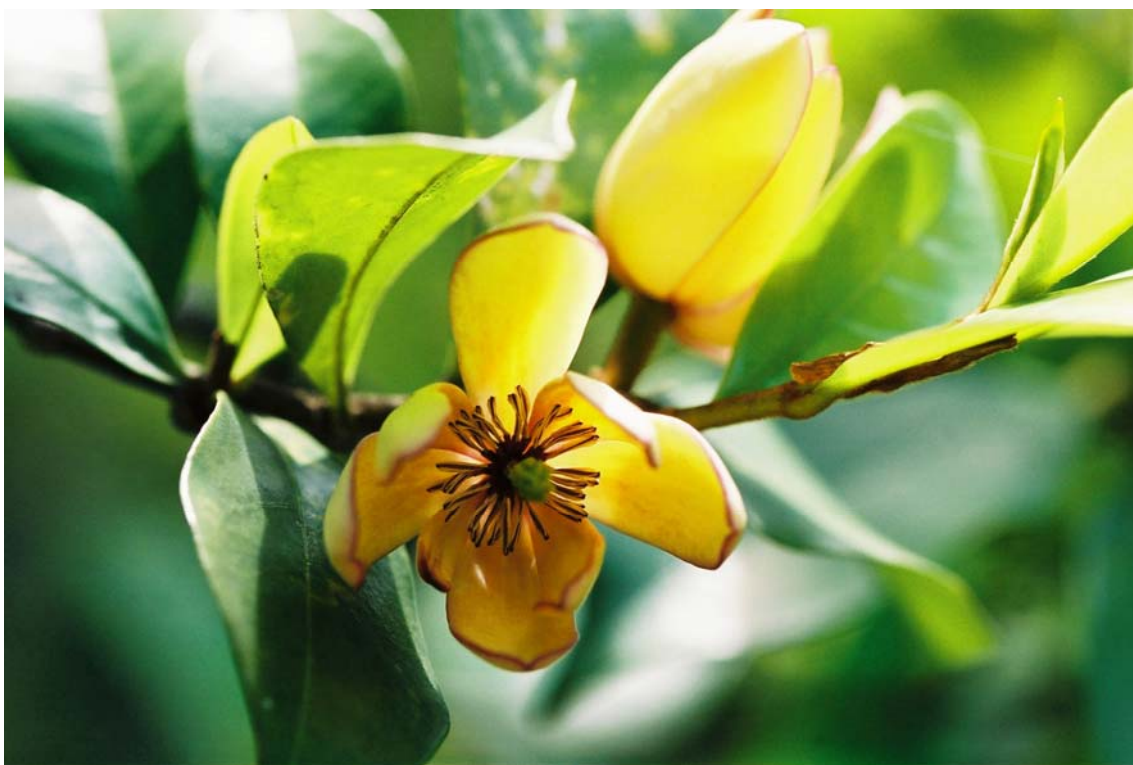
オガタマの学名は『*Michelia compressa*』で、属名はスイスの植物学者M.ミケーリの名に因み、種小辞は扁平のという意味である。中国では『黄心樹』と呼ばれているものの、これは誤用とされ、近縁種もしくは別種と思われる。カラタネオガタマとかトウオガタマと呼ばれている近縁の種は、花色がずっと濃くむしろ紫がかっている。

オガタマの木は常緑である上に、葉には美しい光沢があり、しかも香りのよい花を咲かせたから、古くから神が宿る木として大切にされていた。神社の境内に植えられているのもこのためで、常陸宮家の紋章は菊の花のまわりを、オガタマの木で囲んだものであり、1円硬貨の表のデザインにも用いられている。またその実の形から、巫女が神楽などで使う鈴はオガタマの実をかたどったものともいわれている。

『記・紀』においては天照大神が素戔嗚尊(スサノオノミコト=『古事記』では須佐之男命)の狼藉に耐えかねて天の岩戸にお隠れになったときに、天岩戸の前で天鈿女命(アメノウズメノミコト=『古事記』では天宇受賣命)が裸踊をした際に手に持っていたのは、笹の葉ではなくこのオガタマであったとする説もある(03-04-08 タブの項参照)。葉からは香料をとり、樹皮からは鳥糞を作る。材は床材として用いられ、木の葉はミカドアゲハという、アオスジアゲハに近い美しい蝶の食樹にもなっている。この蝶は主に九州、四国に産し、残念ながら関東では滅多に見られない。



カラタネオガタマの花、天岩戸の前で天鈿女命(アマノウズメノミコト)が裸踊をした際に手に持っていたのは、笹の葉ではなくオガタマであったとする説がある(東京都東小平市薬用植物園)。



オガタマはサカキなどと同様、神様との結びつきが強い。写真はカラタネオガタマ(薬用植物園)。



カラタネオガタマの花である。さいたま市内の個人宅の玄関脇に植えられていたもので、高さはまだ1mに満たない。やがて果実が実ってくればと、ひそかに祈りながら見守っている。



オガタマは神道思想の『招霊(オガタマ)』ら転化したものである。写真はカラタネオガタマで、中国原産。江戸時代に渡来し、暖地の神社や庭木などとして植えられている。 [目次に戻る](#)